

はちおうじ せいせん
八王子遺跡 井泉
出土状況



萩原遺跡群 一宮市

はぎわらいせきぐん



どうたく
八王子遺跡 銅鐸
出土状況



朝日遺跡 銅鐸
出土状況



はじめに

一宮市の日光川水系に形成された自然堤防上には、多くの弥生時代の遺跡が存在し、総称して萩原遺跡群と呼ばれている。その中でも八王子遺跡・山中遺跡は、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて隆盛を誇ったことが、一宮市及び愛知県埋蔵文化財センターが行った発掘調査でわかっている。

本企画展では、両遺跡を中心とした萩原遺跡群の出土資料を展示するとともに、同時期の朝日遺跡の出土資料と比較することで、地域ごとの特徴を見ていく。さらに、発掘調査で確認された洪水の痕跡や、近年明らかになってきた気候変動といった環境要因にも目を向け、こうした変化が尾張平野の社会や暮らしにどのような影響を与えたのかを考える。

目次

はじめに	2
萩原遺跡群の概要	3
萩原遺跡群のはじまり(弥生時代前期～中期)	4
〈コラム①〉条痕文系土器にみられる貝殻条痕	5
〈コラム②〉他地域との関連を示す沈線文系土器	5
銅鐸の埋納(弥生時代中期)	6
〈コラム③〉朝日遺跡の銅鐸	6
弥生時代後期の標式土器	7
〈コラム④〉中期と後期の円窓付土器	8
〈コラム⑤〉終焉の石器	8
巨大な方形区画と井泉	9
弥生時代の気候と濃尾平野の集落構造	10
萩原遺跡群のその後、日光川流域では	12

凡例

- ・本書は2026年4月25日から6月21日まで、あいち朝日遺跡ミュージアムで開催する企画展「一宮市萩原遺跡群」の展示パンフレットである。
- ・本企画展の年代観は、弥生時代前期(BC6～BC4c)、弥生時代中期(BC4～BC1c)、弥生時代後期(AD1～2c)、弥生時代終末期(AD2末～3c)、古墳時代前期(AD3c中頃～4c)とする。
- ・掲載資料には、本企画展で展示されていないものもある。
- ・掲載資料のうち、重要文化財には「◎」、市指定文化財には「○」を付している。
- ・掲載写真及び図の出典は頁下に記した。
- ・本書の執筆・編集は、松本彩が行った。なお、8頁のコラム⑤は原田幹が執筆した。
- ・本企画展開催にあたり、下記の機関・個人から協力を得た。
一宮市博物館 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団愛知県埋蔵文化財センター
赤塚次郎 安達友隆 石黒立人 瀧はる香 田中良 樋上昇

表紙:(左上)八王子遺跡 井泉出土状況、(右上)同 銅鐸出土状況、(左下)朝日遺跡 銅鐸出土状況(愛知県埋蔵文化財センター提供)
どきどきフレンズ(一宮市博物館提供)

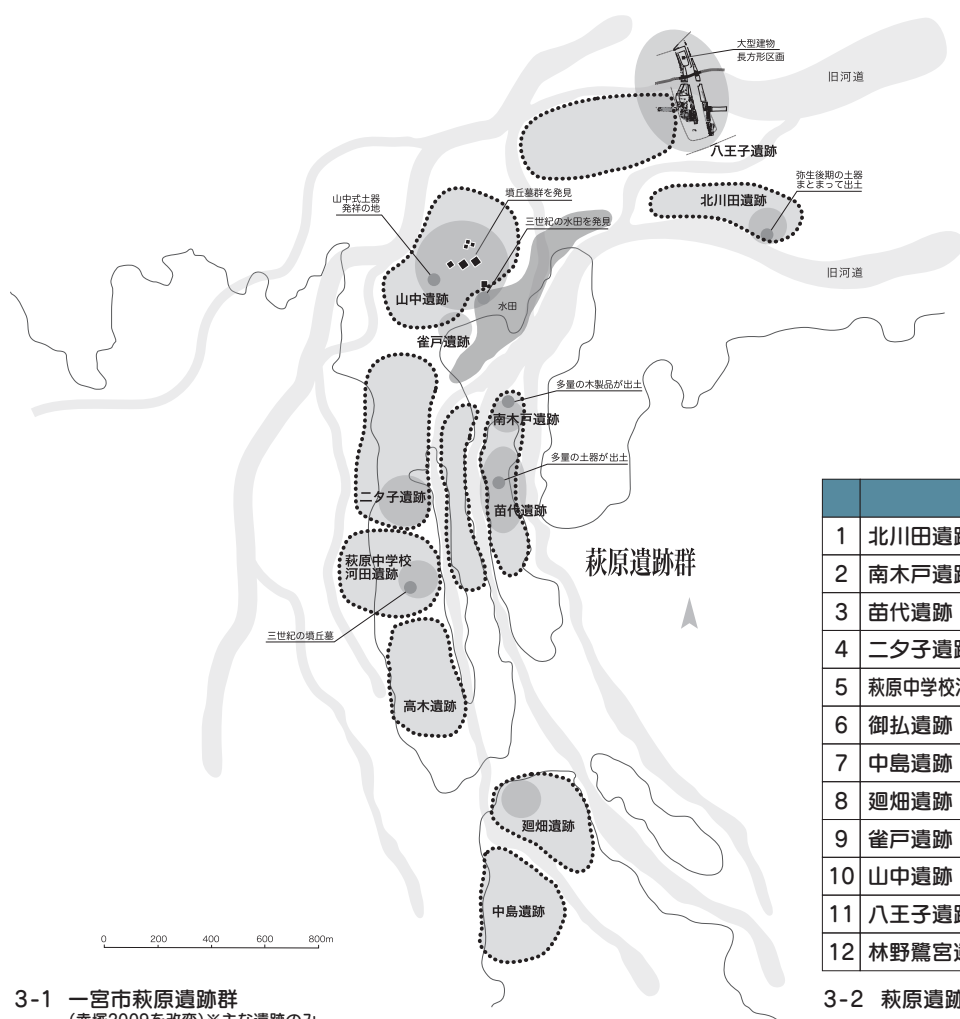
萩原遺跡群の概要

日光川左岸の複数の河道によって形成された自然堤防上には、南北3.5km、東西0.8kmの範囲に多くの弥生時代の遺跡が存在しており、総称して萩原遺跡群と呼ばれている。

微高地には弥生時代前期から遺跡が点在し始め、中期になると萩原中学校河田遺跡を中心にまとまりがみられる。そして、後期から古墳時代にかけて、南北に遺跡群が拡大する。

愛知県埋蔵文化財センターによって発掘調査が行われた八王子遺跡からは、銅鐸が倒立の状態で見られ、また愛知県内で初めてとなる井泉遺構(水辺の祭祀を行った跡)も発見された。

濃尾平野の弥生時代の遺跡の多くは、朝日遺跡のように古墳時代に入ると消滅してしまう。しかし、萩原遺跡群は、古墳時代以降も継続する稀有な遺跡群である。



遺跡名		出典
1	北川田遺跡	きたかわだ ①
2	南木戸遺跡	みなみきど ①
3	苗代遺跡	なわしろ ①
4	二夕子遺跡	ふたご ①
5	萩原中学校河田遺跡	はぎわらちゅうがっこうかわた ①
6	御払遺跡	おはらい ①
7	中島遺跡	なかしま ①
8	廻畑遺跡	まわりばた ①
9	雀戸遺跡	すずめど ①
10	山中遺跡	やまなか ①②③
11	八王子遺跡	はちおうじ ④
12	林野鷲宮遺跡	はやしのさぎみや ⑤

3-1 一宮市萩原遺跡群 (赤塚2009を改変) ※主な遺跡のみ

3-2 萩原遺跡群遺跡一覧

萩原遺跡群関連報告書

- ① 澄田正一・大参義一・岩野見司1967『新編一宮市史』資料編2
- ② 財団法人愛知県埋蔵文化財センター1992『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財報告書第40集
- ③ 財団法人愛知県埋蔵文化財センター『山中遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財報告書第45集
- ④ 財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター2001『八王子遺跡』愛知県埋蔵文化財報告書第92集
- ⑤ 一宮市2023『愛知県一宮市 林野鷲宮遺跡発掘調査報告書～物流施設建設工事に伴う発掘調査報告書～』

萩原遺跡群のはじまり(弥生時代前期～中期)

萩原遺跡群のうち、発掘調査が行われた八王子遺跡と山中遺跡からは、弥生時代前期にさかのぼる遺構・遺物が出土した。前期から中期にかけては、安定した微高地上に集落が築かれている。

八王子遺跡の調査から、遺跡の南側で、木曾川の旧流路の1つであると考えられる幅300mほどの河道が検出されており、その北側には弥生時代前期と中期中葉の2つの環濠集落が形成されていた。しかし、中期中葉になると環濠の埋没がはじまり、一旦は集落は途絶える。中期末には新たに集落域が形成されるが、再度廃絶してしまう。

八王子遺跡の発掘調査からは、初期稲作文化の指標でもある遠賀川系土器や、縄文時代の土器に系譜をもつ条痕文系土器^{じょうこんもん}が出土したほか、周辺地域との交流を示す土器、石器を作った痕跡とみられる剥片類も多数出土した。

中期末になると、東海地方に特徴的にみられる台付甕^{がめ}もいち早く作られるようになった。



4-1 遠賀川系土器壺 八王子遺跡
(弥生時代前期/一宮市博物館蔵)



4-2 遠賀川系土器甕 八王子遺跡
(弥生時代前期/一宮市博物館蔵)



4-3 条痕文系土器壺 八王子遺跡
(弥生時代前期/一宮市博物館蔵)



4-4 ©条痕文系土器甕 朝日遺跡
(弥生時代前期/本館蔵)



4-5 ©台付甕 朝日遺跡
(弥生時代中期/本館蔵)

コラム① 条痕文系土器にみられる貝殻条痕

弥生時代前期から中期にかけて、二枚貝(5-1)を使った施文^{せもん}がみられる。

5-2は二枚貝の背面を粘土に押し当てて施す文様で、特に突帯^{とつたい}に施文されることが多い。

5-3は、山中遺跡から出土した条痕文系土器の破片である。左の1点は貝殻の線が太い、粗めの条痕であるが、右の4点は貝殻の線が細く、緻密である。粗めの条痕は、朝日遺跡で出土する条痕文系土器によくみられるが、細密な条痕は、萩原遺跡群を含めた日光川流域の遺跡でよくみられる。この条痕の太さの違いは、二枚貝の種類による。粗めの条痕はハイガイ、細密な条痕はサルボウガイによって施文された可能性が高い(石黒2011)。



5-1 二枚貝(左:ハイガイ、右:サルボウガイ)
(本館蔵)



5-2 二枚貝背面の押圧 八王子遺跡
(弥生時代前期/一宮市博物館)



5-3 貝殻条痕(左:粗い条痕、右:細密条痕)
山中遺跡
(弥生時代前期/一宮市博物館蔵)

コラム② 他地域との関連を示す沈線文系土器

沈線文系土器は、弥生時代前期から中期にかけての濃尾平野を中心に、中部地方全域に分布する、ヘラ描きの沈線を多用する土器のことをいう。縄文時代の深鉢が、弥生時代の前期にかけて次第に壺や鉢などに形態をかえる。

山中遺跡から出土した沈線文系土器は、肩部の屈曲が強い。口縁部にみられる山形の突起、口縁部内側の文様、区画した枠の中を文様で飾っている点など、北陸地方から信濃地方でみられる土器との類似性がみられる(服部1992)。

一方で、八王子遺跡から出土した沈線文系土器はあまり肩部の屈曲は強くなく、全体の器形が中部高地でみられる土器と類似する。また、文様の構成は中部高地及び美濃地方でみられる土器と類似している。

八王子遺跡と山中遺跡は近い場所に位置するのに対して、土器の影響を受ける地域が異なっている点も興味深い。



5-4 沈線文系土器 壺
山中遺跡
(弥生時代前期末/
一宮市博物館蔵)



5-5 沈線文系土器 鉢
八王子遺跡
(弥生時代前期/
一宮市博物館蔵)

銅鐸の埋納(弥生時代中期)



6-1 ○銅鐸・舌 八王子遺跡
(弥生時代中期後葉～末／一宮市博物館蔵)



6-2 銅鐸出土状況 八王子遺跡

発掘調査中の出土事例としては愛知県内で2例目となった八王子銅鐸は、弥生時代中期の3重の環濠の内側から発見された。

この銅鐸は上下を逆さまにした倒立状態で埋められていた。一般的に銅鐸は朝日遺跡出土例のように横倒して^{ひれ} 鱗をたてて埋めることが多く、逆さまに埋められている状況は全国的にみても珍しい。

銅鐸は高さ21.6cmの外縁鈕式銅鐸。体部の鱗付近に流水文^{りゅうすい}がわずかに残存する。鈕の部分には幅1cmほどの光沢が見られる。紐ずれによって生じた痕跡と考えられ、この^{まめつ} 摩滅の痕跡から、鈕の上部にも紐がまわるよう^{ちゆう} にかけて銅鐸が吊り下げられていたことがわかった(一宮市博物館2001)。

銅鐸が埋納された穴から15mほど離れた大型方形周溝墓の溝の中からは、鳴らす道具である^{ぜつ} 舌とみられる石製品が出土しており、埋納された銅鐸と何らかの関係があるのかもしれない。

コラム③ 朝日遺跡の銅鐸



6-3 ◎銅鐸 朝日遺跡
(弥生時代中期末～後期初め／本館蔵)

愛知県で発掘調査中に銅鐸が初めて発見されたのが、朝日遺跡である。

朝日遺跡の銅鐸は、南居住域の南、弥生時代後期の2重環濠の外側で、方形周溝墓との間で発見されている。鱗を立てた横倒しの状態で埋納されていた。銅鐸の機能の1つに、内と外を隔てる結界のような役割が想定されている。この想定に基づけば、朝日遺跡の銅鐸は、居住域の南限を区画するために埋納されたのかもしれない。

高さは46.3cmの^{とつせんちゆう} 突線鈕式銅鐸。身は4区に区分され、文様は^{けさう} 袈裟襷文と^{のこ} 鋸歯文、同心円文から構成される。「聞く銅鐸」から「見る銅鐸」への^{そけい} 過渡期にあたる資料である。のちに、この銅鐸を祖型とする^{さんえんしき} 三遠式銅鐸が流行した。



6-4 銅鐸出土状況 朝日遺跡

弥生時代後期の標式土器

弥生時代後期の濃尾平野では、八王子遺跡、山中遺跡から出土した土器を基準として、八王子古宮式、山中式の2つの土器型式が設定されている。さらに、山中式の時期には、伊勢湾西岸部から静岡県西部の天竜川西岸にいたるまで、広範囲に共通性の高い土器群が用いられた。

山中式期の土器は、櫛状の工具による横線文や波状文が特徴である。高杯は外反する杯部をもつものや、全体の形状がワイングラスのような形のものも存在する。

弥生時代後期の土器の中には、ベンガラを使って赤く塗られたパレススタイル土器が存在し、特に山中式では壺や高杯など様々な器種に赤彩がみられるのが特徴である。



7-1 山中式遺跡出土土器
(弥生時代後期／一宮市博物館蔵)



7-2 山中式土器 (左から)高杯 鉢 器台
山中遺跡
(弥生時代後期／一宮市博物館蔵)



7-3 山中式土器 壺 山中遺跡
(弥生時代後期／一宮市博物館蔵)



7-4 山中式土器 台付甕 山中遺跡
(弥生時代後期／一宮市博物館蔵)



7-5 山中式土器 高杯 山中遺跡
(弥生時代後期／一宮市博物館蔵)



7-6 パレススタイル土器
(左から)小型壺・蓋 長頸壺 山中遺跡
(弥生時代後期／一宮市博物館蔵)



7-7 パレススタイル土器 高杯 苗代遺跡
(弥生時代後期／一宮市博物館蔵)



7-8 パレススタイル土器 壺 北川田遺跡
(弥生時代後期／一宮市博物館蔵)

7-1・7:一宮市博物館提供、7-2~6・8:本館撮影

コラム④ 中期と後期の円窓付土器

円窓付土器は尾張地域を中心に分布するが、その大半は朝日遺跡から出土したものである。朝日遺跡では弥生時代中期後半に展開する墓域とその周辺から出土することが多い。朝日遺跡で出土する円窓付土器は、窓の大きさがこぶしより少し大きく、窓の大きさがそろっているのも特徴である。

萩原遺跡群では、苗代遺跡から1点だけ出土している。円窓付土器に脚台が付くのも珍しい。窓の穴の大きさは朝日遺跡のものに比べて、やや小ぶりである。弥生時代後期の資料で、朝日遺跡よりも後の時期に作られている。



8-1 円窓付土器 朝日遺跡
(弥生中期後半/本館蔵)



8-2 円窓付土器 苗代遺跡
(弥生後期/一宮市博物館蔵)

コラム⑤ 終焉の石器

弥生時代中期から後期にかけて、道具の主役は石から鉄へと劇的な交代を遂げる。大陸から伝わった鉄器の普及にともない、それまで生活や生産を支えてきた石器は、しだいにその役割を終えて姿を消していった。

八王子遺跡では、この転換期にあたる弥生時代後期前半(1世紀頃)の磨製石鏃、打製石斧、スクレイパー、粗製剥片石器などがまとまって出土している。これらの石器群は、形態や製作技術の面では弥生時代中期末の特徴を継承している。しかし、これらは石の利器が実用の道具として一線で活躍した最後の様相を物語る資料でもある。



8-3 弥生時代後期の石器
(上左)磨製石鏃、(上右)打製石斧、(下)粗製剥片石器
八王子遺跡
(弥生時代後期前半/一宮市博物館蔵)

磨製石鏃

矢の先端に取り付けられた石の矢じり。多様な形態がみられる。

打製石斧

「斧」という名前だが、土を掘り起こす道具の刃として使われた石器。

粗製剥片石器

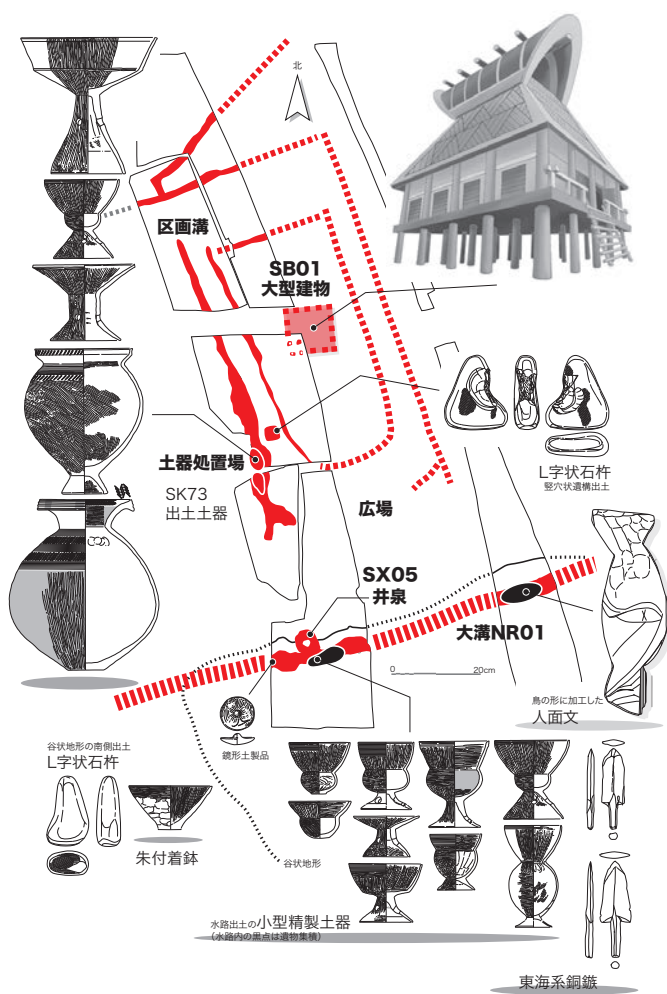
石を打ち割った際の鋭利な縁辺を刃として利用した石器。刃先の使用痕(光沢)から、収穫具として用いられたと考えられる。

巨大な方形区画と井泉

八王子遺跡には浅い谷があり、谷の北岸には掘削された幅1mの大溝(NR01)、さらにその北には80m×40mの溝で囲まれた方形区画があり、この中には大型掘立柱建物が1棟(SB01)建っていた。建物付近には、儀式で使用されたと考えられる土器群が一括廃棄された土坑(SK73)があり、古手のS字甕(9-4)やL字状の石杵(9-5)などが出土した。

方形区画の西辺を南に伸ばしたところと大溝がぶつかるあたりでは、直径5mにも及ぶ巨大な素掘りの井戸(井泉SX05)が発見された。井戸の外縁はすり鉢状を呈し、中央部は垂直に掘削されている。大溝との接点には、大型の部材と杭によって組み合わされた堰が構築されており(9-3)、泉の水を貯えていたとみられる。井泉の中央部には梯子が備えられていた。周辺からは、小型品や未使用品など、祭祀のために特別に作られた大量の土製品、木製品などが出土している(9-2)。

井泉につながる大溝からは鳥形木製品が出土している(9-6)。この鳥形木製品には線刻で人面が描かれており、元々人面が描かれていた板を鳥形に再加工したものとみられる。



9-1 方形区画と井泉遺構の位置



9-2 大溝(NR01)出土土器



9-3 井泉出土状況 八王子遺跡



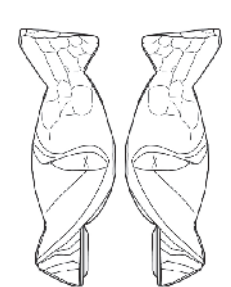
9-4 S字甕片



9-5 石杵



9-6 鳥形木製品



9-7 鳥型木製品実測図 (右は左を反転して表示)

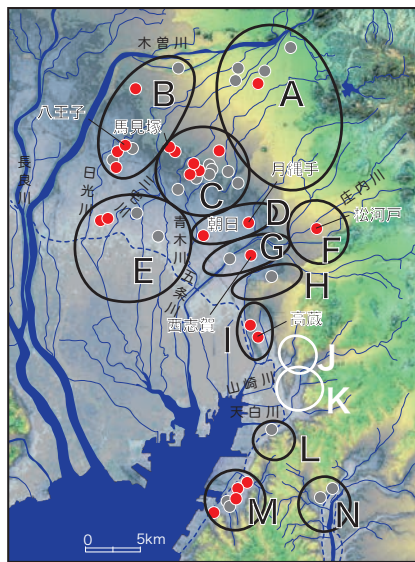
9-2.4.5.6(古墳時代前期/一宮市博物館蔵)

弥生時代の気候と濃尾平野の集落構造

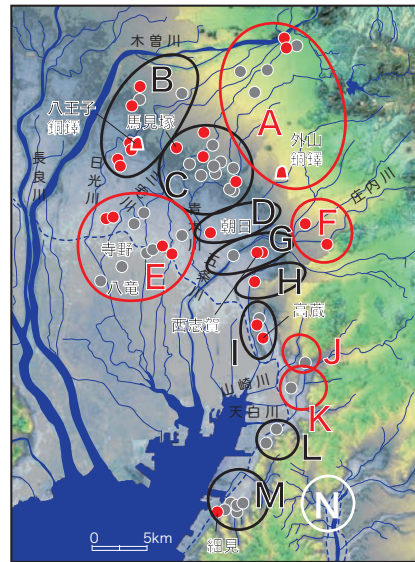
八王子遺跡の発掘調査から、弥生時代中期から後期にかけて洪水による堆積とみられる砂層が検出されている。また朝日遺跡でも、中期後葉に谷に堆積した砂層が発見されており、河川活動が活発化し洪水が起こっていたことがわかる。

2010年代頃から研究が進展した酸素同位体比年代測定法※によって、縄文時代中期から現在にいたるまでのさまざまな時代を対象に気候の復元が進み、過去数千年にわたって年単位での降水量・気温の変動パターンが明らかにされてきた(中塚2021)。中部日本の弥生時代前期末から中期中葉までは、比較的乾燥・温暖な気候が続いていたが、中期末から後期にかけては急速に湿潤・寒冷化が進んでいる。この湿潤化は、必然的に水害を拡大させたと考えることができ、濃尾平野の遺跡の立地や集落・墓域のあり方にも大きな影響を与えたと考えられる。

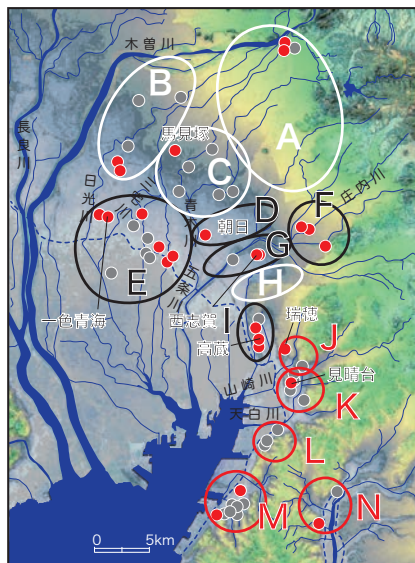
※酸素同位体比年輪年代法とは、木材の年輪の主成分であるセルロースに含まれる酸素同位体を分析することで、木の生息環境にかかわらず夏の降水量や気温を正確に復元する方法。



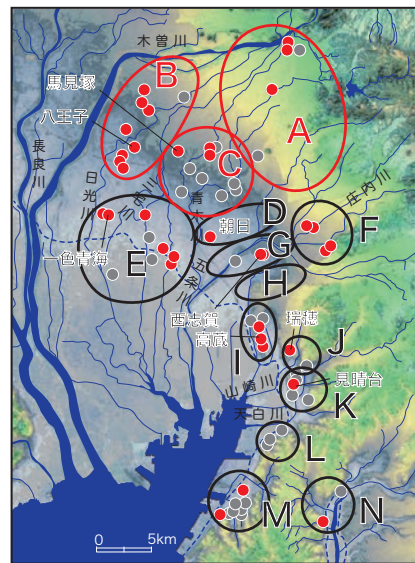
10-1 弥生時代前期(BC5c頃)



10-2 弥生時代中期前半~中葉(BC4c~BC2c中葉頃)



10-3 弥生時代中期後葉(BC2c中葉~BC1c中葉頃)



10-4 弥生時代中期末(BC1c中葉~AD1c中葉頃)

10 濃尾平野の遺跡分布の変遷(弥生時代前期~中期末) B: 萩原遺跡群含む日光川上流域 D: 朝日遺跡周辺
遺跡数が増加したエリアは黒(急増したエリアは赤)、減少したエリアは白抜き

濃尾平野を概観し、特に萩原遺跡群を含むBエリアと、朝日遺跡が所在するDエリアを比較してみる。

前期から中期中葉までは、両者とも遺跡が集中し、増減が見られない(10-1・2)。これは長期に渡って気候が安定し人口が増加した結果、規模を拡大できる立地の集落が残ったためと考えられる。

中期後葉になると、萩原遺跡群は遺跡数が激減する(10-3)。中塚による気候変動パターンとあわせても要因が読み取れず、土器や人の移動など別の社会的要因が関係しているのかもしれない。

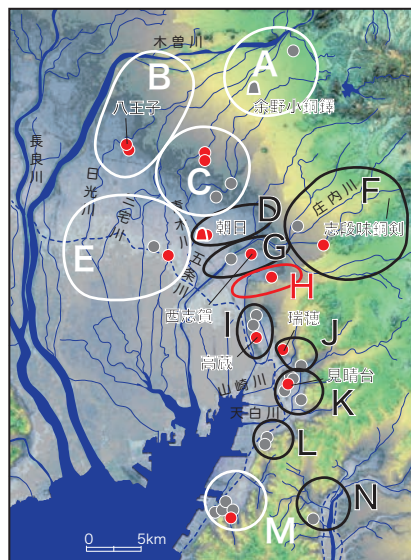
中期末になると、寒冷で湿潤な気候となるのに対して、両者とも遺跡数は増加している(10-4)。朝日遺跡では降水量の増加により大規模な集落が形成しにくく、結果的に環濠集落が解体する。小規模な居住域と墓域がセットになり、複数点在する。萩原遺跡群でも同様の可能性が高い。

ここまでの時期は、気候が悪化しても、それぞれのエリア内で集落を分散させるか、台地上に移住することでやり過ごしていたことがわかる。

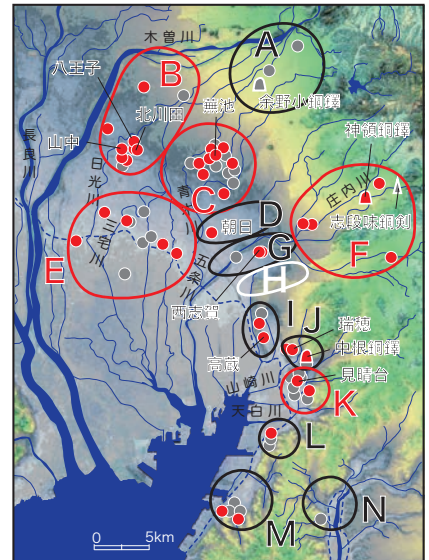
しかし、後期初頭から後期前半1段階に入ると、朝日遺跡では集落が継続するのに対し、萩原遺跡群では八王子遺跡のわずかな集落が展開するのみとなる(11-1)。規模も小さくなるため、この地を放棄して、他地域に人が流出した可能性も考えられる。

後期前半2段階になると朝日遺跡では改めて環濠が掘削され、居住域の付近に墓域を複数設けるようになる。萩原遺跡群では、八王子遺跡は居住域、北川田・山中遺跡では墓域というように、遺跡ごとに別の機能をもつようになり、結果遺跡数が拡大する(11-2)。

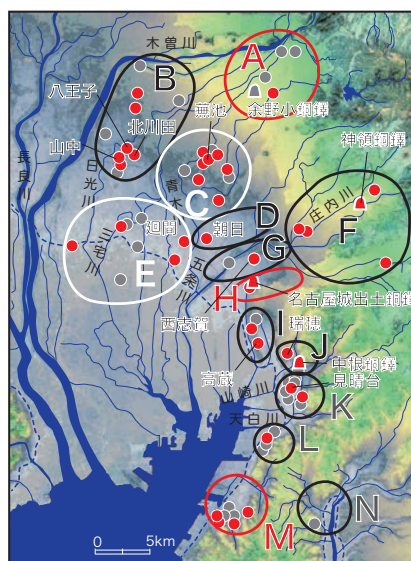
後期初頭以降は広い地域で人の移動が活発化したことが指摘されており、後期前半2段階以降は、県内の他地域にも遺跡群が形成されたり、集落規模が拡大している。土器様式の分布圏をみても、弥生時代中期末までは尾張平野部の中で複数の異なる系統の土器群が狭い分布圏で併存していたが、後期になり山中式期になると、広範囲に共通性の高い土器群を用いている(11-3・4)(樋上2020)。



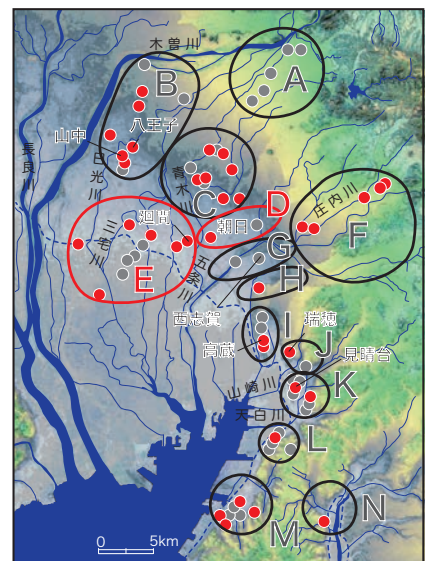
11-1 弥生時代後期初頭～前半1 (AD1c中葉～後葉頃)



11-2 弥生時代後期前半2 (AD1c後葉～2c初頭頃)



11-3 弥生時代後期後半 (AD2c初頭～後葉頃)



11-4 弥生時代後期末～古墳時代早期 (AD2c後葉～3c初頭頃)

11 濃尾平野の遺跡分布の変遷(弥生時代後期～古墳時代早期)

萩原遺跡群のその後、日光川流域では

濃尾平野の弥生時代の遺跡の多くは、弥生時代後期後半から終末期には、集落が沖積低地で形成され、大規模化する。しかし、古墳時代初頭には集落は散在化して規模が小さくなり、古墳時代前期末になると大幅に集落が縮小し、古墳時代中期には途切れてしまう。

しかし、萩原遺跡群のうち、八王子遺跡の発掘調査からは、弥生時代に引き続き、古墳時代、古代、中世と遺跡は連綿と続いていくことがわかっており、さらに同じ日光川流域の数キロメートル上流にある西上免遺跡^{にしじょうめん}では、墳丘長40.5mに及ぶ前方後方形の墳墓も発見されている。



12-1 西上免遺跡前方後方形墳墓



12-2 西上免遺跡出土土器
(古墳時代前期／一宮市博物館蔵)

参考文献

- あいち朝日遺跡ミュージアム2022『一色青海遺跡-100年の弥生ムラ-』
- 赤塚次郎2009『幻の王国・狗奴国を旅する-卑弥呼に抗った謎の国へ』風媒社
- 石黒立人2009『伊勢湾周辺地域における弥生大規模集落と地域社会』『国立歴史民俗博物館研究報告』第149集
- 石黒立人2011『伊勢湾岸域の「縄文／弥生」あるいはポスト・フェストゥムからの帰帰-連続と不連続の均衡へ-』『伊勢湾岸弥生社会シンポジウム前期編 論集 縄文／弥生移行期社会論』
- 一宮市博物館2000『企画展 八王子遺跡』
- 一宮市博物館2001『銅鐸から描く弥生社会～埋められた銅鐸の謎～』
- 財団法人愛知県埋蔵文化財センター1997『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財報告書第73集
- 中塚武2020『酸素同位体比年輪年代法-先史・古代の暦年と天候を編む』同成社
- 服部信博1992『V考察 [その他の系統の土器]』『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集
- 原田幹2013『東西弥生文化の結節 朝日遺跡』シリーズ「遺跡を学ぶ」088 新泉社
- 樋上昇2016『樹木と旅する古代人 木製品が語る弥生・古墳時代』歴史文化ライブラリー434 吉川弘文館
- 樋上昇2020『東海地方における弥生～古墳時代の遺跡変遷と気候変動』『先史・古代の気候と社会変化』気候変動から読みなおす日本史第3巻 臨川書店

12-1・2:愛知県埋蔵文化財センター提供

あいち朝日遺跡ミュージアム

■ 愛知県清須市朝日貝塚1番地 ■ TEL: 052-409-1467 ■ 駐車場 15台

企画展 「一宮市萩原遺跡群」

編集・発行: あいち朝日遺跡ミュージアム
2026(令和8)年4月25日発行



**AICHI ASAHI
SITE MUSEUM**
あいち朝日遺跡ミュージアム

